

---

# 東方悠々夢

皆月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方悠々夢

### 【Nコード】

N2442U

### 【作者名】

皆月

### 【あらすじ】

外の世界との結界に綻びが生じるという異変が起こった幻想郷。対処しきれない結界の綻びに、痺れを切らした博麗神社の巫女さんこと博麗霊夢は異変の元凶をいつも通りに懲らしめようとしていた。そんな割といつも通りの幻想郷の異変から物語は展開される。

## プロローグ 独り法師（前書き）

弾幕S T G『東方Project』シリーズの二次創作・幻想入りモノです。

色々な作品に影響されて描き始めたら出来てしまった……。

独自のキャラ設定付けがありますがご容赦を。

読んで戴けると幸いです。

## プロローグ 独り法師

教室の窓から心地よい風が吹いて、頬をなでる。高校生活一年目の終わりを告げる終業式が終わり、現在、教室の机に突っ伏しながら、俺、伊佐風悠樹は担任の話を聞き流す。

誰も聞いてねーつつうの。

黒板の前に立っていて、あとはクラスの解散の合図を言うだけだというのに、担任の教師は長々と話をしている。長話は校長の話だけで充分なのに……。

机の上に置いた鞆に顔をうずくめながら、担任を忌々しげに睨む。もちろん俺の視線になど気付くはずもない。なんたってこの担任、クラスの全員が全員、早く帰らせろやオーラを無言で発しているのに、怯みもせず話を続けるような奴なのだ。

隣の席では、顔と名前の一致しない女子が、後ろの席の女子と話をし始めている始末。ひそひそ話になっていないひそひそ話の内容が、俺の耳に勝手に入ってくる。

吸血鬼がどうかいう話だった。

最近、この町では、吸血鬼やらそういう類の噂が絶えない。

最近とは、本当に最近で、ここ一週間くらいの話だ。

吸血鬼。

俺だってその言葉くらいは知っている。

そもそも、吸血鬼を知らない奴の方が珍しいか。

近所の小学生もそういう類の話で騒いでいたけれど、まさかウチの高校までそんな妄誕無稽な話が伝わっているとは想像も出来なかった。

ゲームやら漫画、ラノベは俺だって好きだぞ、だけど、そういうったモノが存在して堪るか。

フィクションは、やはりフィクションだから面白いのであって、現実に起きたらそれはただの悲劇だ。

例えば勇者が魔王を倒す物語が現実にあったとして、エンディングを迎えたときには、夢の無い話だけど、リアルに考えて相当な被害を被ってるんだし。

現実は何んだかんだで非情なんだよ、いつも。

それに俺なんか、勇者のパーティーどころか村人Aとして真っ先に魔王に殺されてしまいそうな程貧弱なんだぞ。

咬ませ犬以下のポジションを貰うこと間違いない。

例えば勇者の素質があるなんて言われても、他人の為なんかより、自分の保身に走るしね、俺は。

作戦は『いのちだいじに』でファイナルアンサーだ。

大体、すぐに誰かの為に……なんていう奴は逆に胡散臭くて嫌いだ。

そういう奴に限って、自分の為にしか動いてないんだから。

人の為について書いて偽りってな。

……って、何を訳の分からないことを語ってるんだろう、俺。

馬鹿らしい。

そう思いながら、瞼を閉じて、これから後十分は続きそうな担任の容量を得ない長話を寝てやり過ごすことにする。

あーあ、話し相手が欲しい。

さっきから担任への文句ばかりを言っていて、感じの良いキャラには見えない俺だけど、それは事実である。

このクラスの中では俺ははつきり言って一人ぼっち、孤立している。良く言えば孤高。悪く言えば……多すぎて言葉の選択に困る。

まあ、とにかく。

この世に、存在感を数値化するスカウターの何かがあったら、間違はなく一を叩きだすであろう俺にとって、この学校という場所は苦でしかない。

特に、数人でグループを作って何かをする時のあの孤立感は泣きだしたくなってしまいそうになるほどだ。

中学では充実していた人間関係はいずこへ……。

いやいや、過去を振り返るのは大人がする事、子供なら未来に希望を持ち続けなければ。

子供はいつかきつとって未来に期待する、大人は昔はよかったって過去を懐かしみ振り返る。

これって割と的を射てたと思ってんだけどなあ。これを真実だとすると、俺は一夜の営みを行わずして既に大人への仲間入りを果たしてしまっていたらしい。

遺憾である。まことに遺憾である。

まあ、そんな青春という道をおもくそ逆走している俺は、勉強の方も芳しくない。

友達も居なくて、勉強も出来ない、それが俺、伊佐風悠樹である。そもその原因を挙げるなら、それはやはり高校の選択だったのだと思う。

ちょっとレベルの高い私立高校へ挑戦してみたのがいけなかった。自分で言うのもなんだけど、当時の俺はちょっとばかり勉強が出来るクチの奴だった。

親の薦めで、どうせ落ちるんだろうなと思いつながら受けてみたところ、運命の神様の悪戯か、合格してしまったのだ。

中学時代の友人は全員、公立高校へ流れていき、友人ゼロから始まったことに軽いショックを受けたまま高校生活が始まった。

そこからは墮落の一方だ。

勉強についていけず成績降下。中学時代は基本、家の中で良い子をやっていたせいか、親にとってはそれが不満だったらしく、家族との関係に溝が出来てしまったように感じる。

んー……。

今、考えてみると、人生は本当にままならないものだなあ。

気付けば、手元にあった色んなモノが無くなっているんだもん。

おっと……ようやく担任の長話が終わったようだ。

席から立ち上がり、委員長の終礼の声を聞いて、軽く首を縦に振るだけの礼をして、鞆を手にとって教室を出る。

これでこのメンバーとはお別れである。

理由は言わずもがな、一年から二年に上がる際のクラス替えにある。と言っても、おそらくクラスの人数の半分くらいはそのままなんだろうけど。

いっそのこと、ごちゃまぜにしてくれた方が俺にとっては救いだ。後ろで、これから何する？ とクラスの誰かが誰かに言った言葉が、俺の胸にやけに強く突き刺さる。

はあ、どうしてこんなことになってしまったんだろうか。もっと、早くに気付けばよかったよ。

人と上手く付き合うコツは、相手の考えに同意してやることだつて。

といっても、入学当時の俺は、ひどく落ち込んでいたから、気付いても積極的にクラスの誰かに話しかけることなんてなかったんだろうけど。

向こうから話しかけてきても素っ気なく返してしまっていた自分が恨めしいよ。

そんな事を考えながらロッカーを開けて、赤いラインだけが特徴の、おしゃれさの欠片もない靴を取り出して、足元に落とす。

パタン、という音が玄関に響く。

俺の靴より、幾分かデザインのマシな上履きを脱いで――この高校ではスリッパかこの上履きか好きな方を選べて、足元が冷えるので上履きを選んだ――赤ラインだけが特徴な靴を履きながら、脱いだ上履きをロッカーに放って、入ったのを特に確認することなく右手でロッカーを閉める。

鍵を閉める必要はない。いじめられているわけじゃないし。そもそも、俺はいじめられる程の存在感すらも発してはいないから、気にする必要はないだろう？

きつと——あれ？ このロッカーって誰のだっけ？ みたいな感じだ。いや、知らないけど。

キィー、とちよつとばかり不快な音が鳴るのを気にもせず外へ出る。

俺は中途半端な位置に家があるので、登校時は自転車である。自転車小屋へ向かい、クラスごとに分けられた自転車小屋の自分のクラスの小屋の前に立つ。

うん、やっぱり汚い。

あまり丁寧に整備されているとは言えない自転車小屋を細目で見ながら、自転車をどこら辺に置いたかを、しっかりと確認する。

取り敢えずスペースは作つといてやったから感溢れる作りだ。

まあ、自転車小屋にこだわるくらいなら、校舎の設備を少しでも良いモノにしてくれてという話なんだけど。

ぱつと見て、似た自転車を乗っている奴がいる事もあるので、要注意だ。

以前、俺が間違ってクラスの誰かの自転車に手をかけた時に、それを偶然見た生徒指導部の教師が、自転車を盗ろうとしていたのかと勘違いしたのか、怒られた。名前で自転車の登録番号を覚えてやがったのだ。

こちらにも非があったとはいえ、別に叱ることなんてないだろうに。

……勘違いなのに。

指導部の人間は、不良生徒に対しては少し敬遠気味な態度なのにそうでもない生徒が少しでも『そういうこと』をするときは、やけに厳しい態度でくる。

きつと俺の顔が気弱そうな顔に見えたに違いない。特にあの時の



指導部の教師はしつこくて面倒くさかった。

しかも、その話を聞いた自転車の持ち主からは嫌われるし、散々だった。

時期が時期だったのもあるかもしれない。

一年のだんだんグループが確立していく時期で、そのミスは致命的だった。

そして人の悪い噂は早く、そして大勢に伝わるらしい。実際にやったことよりも大きく。

それは学校だけに限らず、集団の場ならどこでだってそうだと俺は思う。

人と言うのは、裏で誰かの悪口を言うのが好きで好きで堪らないのだ。いや、実際に調べたわけではないんだけど、クラスで一人、誰とも喋らずにぼーっとしているとね、周りからさ、ほら、色々聞えちゃうんだよ。特に女子から。

同時に、人のことを裏で良く言える奴は信頼できると俺は思うんだけど、どう思う？

ちなみに、存在感が無いなりに、嫌われず好かれずのポジションだった俺が、さらにクラスから弾きだされたのも自転車の一件が原因だったような気がする。

とはいえ、別に差別されたわけでも、蔑まれたわけでもないのだけれど。

結局、誰かが悪いのではなく、不貞腐れてた俺が悪いのだ。

まあ、それからというもの、帰りの自転車を出す時は、結構気を遣っている。

ちっぽけな人間だな、と思うかもしれないけれど、実際にちっぽけなんだから仕様が無いだろう？

しかし、どの自転車を見ても、俺の物が無い。

おかしいな。

首を傾げて、一度、所々の錆びがやけに目立つ自転車小屋全体を見つめる。

しばらくして、あ、と何とも間の抜けた声をあげる。

そう言えば今日は、歩きで登校してきたのだった。

何故かと言われれば、やはりそれは気まぐれとしか言えないんだけれど。敢えて理由を挙げるなら、朝早くに目が覚めてしまったからに違いない。

うーん……。いくら朝の事とは言え、忘れるとは間抜けだな、俺。面倒くさ。

何で徒歩で登校しちゃってんだよ。

恨めしいぞ、朝の俺。

日本の人里離れた山奥の辺境の地に存在すると言われている場所。

ここには神隠しに遭った人間や、迷い込んできた人間、そんな僅かな人間と、多くの妖怪など人外の者が住まう、外の世界とは隔離されてしまった土地。故に、外部からここに辿り着くことは普通は出来ず、観測することも出来ない。同時に内部からも外へ出ることは出来ない。

文明の発展によって非科学的事象として『迷信』とされ、世界から弾かれ、捨てられた者が辿り着く、最後の楽園。

一部の人間と、数多の人外が存在する忘れられた世界だ。

幻想郷――――。

それがこの土地に与えられた名前。

二度目だが、この土地――幻想郷は一つの境界と一つの結界によって、外部から隔離されている。故に外部から観測できず、同時に内部から出る事も不可能。

その、はずだった。

事態には、幻想郷に住む多くの者達が気付いていた。外の世界と、幻想郷が一部繋がってしまっている。結界に所々綻びが生じているのだ。それは、今なお拡大している。

幻想郷内部の者は出ようと思えば外に出れるし、外部の者も侵入が出来る状況だ。

とはいえ、滅多なことが無い限り入ってくることはないのだが。ただ、それだけなら問題は無かった。

出る意思があって出るのなら、こちらとしては文句はない。だが、この幻想郷で神隠しが起きている。

結界の綻びに呑み込まれ、姿が消えてしまうのだと言う。

おそらく、行き先は外の世界。

幻想郷のパワーバランスの崩壊の危機。どんな強者でも、一度呑み込まれかければ脱出は困難。それこそ最強クラスでもなければ。

それはつまり、外の世界でも問題が起きる可能性が増える。ここぞとばかりに外の人間を食べたりと、考えられる問題は挙げるとキリが無い。

早々にこの度を遥かに超えた『異変』を調査し、異変を起こした犯人を懲らしめる必要がある。

それが博麗神社の巫女さん、若いながら妖怪退治と異変解決を生業とする、彼女——博麗<sup>はくれい</sup>霊夢<sup>れいむ</sup>の役割だった。

そしてこの緊急事態に彼女は——博麗神社の縁側でお気に入り<sup>タチ</sup>の湯のみでお茶を啜っていた。

まだまだ新米で、博麗の巫女としての経験の少なさと、修行不足の不安要素はあるが、天賦の才を持った、真正正銘の天才である。力の弱い妖怪からすれば、彼女の方がよっぽど化物らしい。

彼女自身は他人の評価は気にしない性質<sup>タチ</sup>なので特に気にしてはいない。

そういえば最近、白黒の魔法使いを見かけない。

結構な頻度で人様の神社へ勝手に上がり込み、お茶と茶菓子を食うだけ食って、好きなだけ好きなことをして勝手に帰っていく、鼠のような奴だ。

もしかしたら、異変の神隠しに巻き込まれたのかもしれない。

まあ、知ったことではないが。

普通ならば、異変解決を生業とする霊夢は、ここで動かなければならないのだろう。だが、いつもなら勘でどうにかなるものが、今回はどうにも上手くいかない。

人里で手掛かりを集めてみたりはしているものの、一向に調査は進まない。

異変調査は勘で何とかしてきたため、本当に頭を使わなくていけないとなると、面倒くさいというのが本音だ。

しかし、動かなければ事はなにも発展しないのも事実。

そろそろ動くか、とそう思い、宙に浮く。

『主に空を飛ぶ程度の能力』

それが博麗霊夢の能力だ。重力から浮いて無重力になる程度の力。幻想郷の中にも人間は居るが、幻想郷内の人間全員がこういった摩訶不思議な（外の常識からすれば）力を行使できるわけではない。彼女は特別なのだ。

確かに、博麗霊夢のように妖怪退治を専業とする者は人里に数は少ないが、それでも僅かばかりいる。

しかし、その者達と博麗霊夢の間には、やはりどうしようもない程の差がある。

それを思うと、自らを『普通』と謳う魔法使いも、やはり異常の一人なのかもしれない。普通ながら、異端。

そんな訳で――彼女はそれを知っているから異変解決に向かうし、妖怪退治をする。

それを知っているから、博麗霊夢は努力をしない。

生まれ持った才能で大抵はどうにかなっているし、努力すれば報われるなんてことはない知っているから、努力する者は報われる

など、都合の良い言葉でしかないことだと、博麗霊夢は知っているから。

努力が結果を生むなんて信じられない。

それが博麗霊夢の考え。

隙間妖怪によって、博麗の巫女に選ばれ、莫大な霊力と様々な不思議能力を生まれついて持っているからこそ、そう思う。故に。

妖怪退治も異変解決もそれら全てを含めて『博麗』を継ぐ者の義務であり、使命である。

空に浮く。

空を飛ぶと、幻想郷が一望できた。

外の世界では、特に——都会では失われてしまった光景がそこにあった。

自然のみが広がり、科学の結晶である物質が存在しない世界。

一陣の風が、優しく頬を撫でる。排気ガスに汚染されていない空気が。緑を感じさせる灰色のない世界。現代の人間からすれば、快適さに欠ける世界。忘れられた生活をする世界が、博麗霊夢の視界に広がっている。

そんな世界を瞳に写しながら、博麗霊夢が異変調査に向かおうとした瞬間だった。

空間が歪んだ。

まるで、紙でも破るように裂かれた空間に、強い引力が生まれた。裂かれた空間は、彼女を呑みこもうとする。

それに対して特に何も感じていないかのように、どこぞの隙間妖怪の能力を思い出しながら、抗いもせずに彼女は呑みこまれた。

——次の瞬間には、幻想郷から博麗霊夢の姿は消えていた。

というわけで、俺、伊佐風悠樹は下校をしていたはずなのだが。  
こっつてどこですか？

ぶっちゃけ迷いました。歩いて帰るのだから、少しでも近道をした方がいいかと、普段通らない道を通った結果がこれだよ。

まあ元々、どちらかと言えば、田舎の方だった場所なんだけれど、こんな所に石造りの階段が続く山なんてあったっけか？

高校から下校してくる生徒が一人くらい周りに居てもおかしくないというのに、周りには一切の人氣が無く、この空間には自分しか存在していないような気さえた。

気付けば、俺はその階段を昇り進めていた。

別に、帰ればいいのに。

特にその場所に興味があるというわけではないのに。

何かに憑かれてしまったように、ただただ階段を昇った。

足を石段の上に置き、もう片足をさらに一段上の石段へ、足を運ぶ。

その階段を昇るという単純作業を続けた。

石造りのボロい階段の外は、もう山奥の森と変わらず、獣道だけで、面白半分でそちらに行ってしまうえば、迷ってしまいそうだった。下手すれば、本当に獣が襲ってきそうだ。

長い。

下から見た時、先がどこまでだか見てなかったけれど、なんだか長過ぎやしないか？ この階段。

というより、まったく人の氣配がしないんだけれど。

本当に大丈夫なのか、ここ。

いきなり、よく分からないが、急に怖くなった俺は、振り返った。そこには、長い長い石段の道。

俺が昇り歩んで来た道が、降りる事が面倒くさそうと感じるほど、長々と続いていた。

一体どれくらい歩いたんだろうか。

さすがにここまで昇っておいて、何もせず引き返すのも嫌だな、とそんなくだらない意地のようなものが俺の足をさらに上へ上へと進ませる。

といっても、上へ行ったところで、何かがあると決まったわけではないのだけれど。

途方もない距離を歩いたような気もするし、実はそうでもなかったのかもしれない。

しばらくすると、ようやく、階段と立ち並ぶ木々の光景以外のものが見えてきた。

鳥居だ。

なんだか妙に嬉しくなり、思わず重くなってきていた脚は、疲れを忘れてしまったように駆けだしていた。

しかし、目の前に広がった光景は、何のことはない、やはり言うべきか、ただの神社だった。

とはいえ、ただの神社にしてはそれなりに大きい。

あんまりイメージはないけれど、神主や巫女さんが住んでいるのか？

それにしても一切の人の気配を感じさせないし、神社も長い間放置されているような気がしないでもない。

なんというくたびれ損。

長い階段を昇って来たその先にあったのは、ただの使われなくなった無人の神社とは。笑い話にもならない。

肩で息をしていた俺は、一度大きく息を吸って、溜息として吐いて、肩を落とす。

帰りもあの長い階段を降りていくのかと思うと心が折れそうだけど、降りなければ帰れない。仕方なくその無人の神社を後にしよう

とした時だった。

上空。

綺麗な蒼が広がる空。

なにも無い空間から、少女が突如として現れたのだ。

本当に突然だった。

少女の姿は、空の蒼とは対の紅色を基調とした巫女装束のような服を身に纏っていた。ただし、普通の巫女装束と明らかに違ったのは、袖が着いておらず、白色の袖を別に括りつけて着用しているところと、袴では無くスカートであるところだろうか。

そのせいで、臍、肩と腋が露出していて微妙にエロい。腋フェチの人間がここにいれば卒倒モノだろう。

大きな赤色のリボンをつけた黒色の艶のある髪の毛が風に靡き、美しさを演出していた。時間にすれば短い間だっただろうが、その間俺はまばたき一つせず、その姿を網膜に焼き付けるように見ていた。見蕩れるというのは、こういうことなんだろうと俺は思う。

その光景は現実のものではない、幻想的な美しさを持っていた、この世のものとは到底思えなかった。

少なくとも、俺の知っている女子のなかには、こんな風に感じさせる奴はいない。未だにクラスの女子は顔も名前も一致しない程だ。それくらいには、衝撃的だった。

言葉にしてしまうと、陳腐になってしまう。

俺の言葉では、彼女という存在を正確に語るのは不可能なのだろうな、と頭の隅で思う。

宙に投げだされるような形となった少女がどうやって現れたなんて知らない。どうやってあんな上空から落ちてきているのかも知らない。

だけど、このまま放っておけば彼女は地球の重力によって落下し、死ぬことは無くとも大怪我をすることはまず間違いないだろう。

突然の出来事に驚いたのは彼女も同じなのか、背中から落ちなが



ら、体を少し傾けて、眼球を動かして地面を見た。

目があった。

数瞬のことであっただろう。

彼女と俺の視線が交錯したのだ。

無意識のうちに、彼女を受け止めるように手を前に伸ばしていた。避けるよりは受け止める方が妥当な判断だと、思ったからだと思う。

次に来るであろう衝撃を想像して、どこまで効果があるかは分からないが、地面を力強く踏み締めた。

空から落ちて来る彼女から目を逸らさず、見上げたまま。

落ちてくる場所に正確に手を伸ばせるように、まるで、野球の初心者が高いフライを補給する時のように、ふらふらと動きながら。

地球の重力に従ってさえいれば、そろそろ距離がゼロになっていはいはずだった。

しかし、呆気ないほどに、不思議なまでに衝撃はなかった。

最初は、落下地点まで手が届かず、彼女は地面に墜落したのかと思った。もしかしたら、彼女という存在はこの世のものと違って質量がないのかとさえ考えた。

だが、それは俺が受け止め損ねて彼女が地面に落下したわけでもなく、まして、俺が受け止めたわけでもなかった。

宙に浮いていたのだ。

巫女。

魔法。

幽霊。

幻想。

落下系ヒロインは？

空を飛んでやってくる系？

幾つかの単語が頭の中に浮かんた。

それらの単語が頭の中をめくるめく巡って、やはり巡った。

天から舞い降りた天使の如く。空を滞空する彼女の周りは、無重力の空間なのではないかと疑った。

掴みどころのない存在。

あらゆるものから浮いてしまっているような、そんな風に見えた。不気味さと神聖さを兼ね備えた不思議な少女。

何故だかとても近づき難く思った俺は、後ずさるようにして彼女から数メートルの距離を置く。

年齢は俺と同じくらいだろうか。

空中に出現した時の感想と同じ、この世のものとは思えない、そう想わせ、尚且つ惹きつけるような不思議な魅力があった。

この空間には俺と彼女以外、誰も居なかった。

まるで、この舞台を用意されていたかのような対面だった。

俺は、ただただ見蕩れていて、驚いていた。

きつと、今の俺の顔は相当間抜けに違いない。

そんな中、彼女は辺りを見回して、言葉を発した。

「ここ、博麗神社じゃないわね。そこのあんた、何か知ってる？」

割と普通に話しかけてきた。神聖さも何もあつたもんじゃない。

いや、人なんだから当然なんだけれど、なあ。

これで、女神のような（優しげな）口調で話していれば、俺は神仏のお告げだと言っても疑わなかっただろう。

「はくれない神社？ 何だソレ。そんな名前の神社、聞いた事ないんだけど」

神社に詳しい奴なら知ってるかもしれないけど、俺には生憎、信仰心など欠片もないんでね。宗教なんて感じるのはクリスマスくらいだ。

そのくせ、縋るものがなくなった時は神様なんてものを頼るんだろうけど、現代人は。

ていうか、高校生で神社を色々知ってるってのは珍しいだろう。

正月に行く神社もここではないし、こんな所があったのすら知らなかったんだから、仕方がないだろう。

「博麗神社を知らないの？ それとあんたの服装、変よ」

「普通の学ランなんだけど……それと一つ言わせてもらおうとお前の服装の方が世間的に見て普通じゃない。てゆーか変だ」

「むむ。巫女の服を変と言うとは、これはお仕置きが必要ね。物理的に」

そう言うのと、巫女さんらしい少女は、どこからか、お札らしきものを取り出した。

というか、お仕置きって可愛い（綺麗な？）同年代の女の子に言われると、ちょっとなにかを感じるものがある。響きのにも。

言っておくが、マゾになった覚えはないし、嬲られるのを快感に感じることもなくて、俺には出来ないぞ。

むしろ心が折れて、自殺しようかと鬱になるね。

あと物理的以外のお仕置きなんてあるのか？

俺のイメージだとなんらかの体罰が真っ先に浮かぶんだけど。

「むちゃくちゃだな……で、そのお札で何が出来るんだよ」

「そうね。例えば……こんなことかしら？」

言うと、彼女の手元にあった三枚ほどのお札に、漫画とかなら気や霊力なんて言われそうな、水のように薄い光が灯る。その摩訶不思議な現象に俺は目を見開いて驚くが、彼女はそれをさも当然のように投擲した。

ただのお札でしか無かったものが、彼女の手から放たれた瞬間、淡い紅の光を放つ光弾となって地面に炸裂した。

漫画で見るような光景である。

もちろん俺は絶句。

口を開いて驚いて、さぞかしおかしな顔をしていただろう。

数秒時間をかけて出てきた言葉はこれだった。

「は……い？」

「この程度の事に驚くということは、ここは外の世界なのかしら？

……ああ、そう言えば変なのに呑みこまれたんだったわね」

普段なら、ここで俺は笑っただろう。

どこの電波を受信してんだよこの野郎、と。

だが、彼女の口にする言葉を俺は否定しきる自信が無かった。それは、今彼女がしてみせた現象の所為であり、この目でそれを見た以上、それを否定することなど俺には出来ない。

だって、お札が、ビームライフル的な弾になったんだぜ？ 目の前で。

目を疑うけど、今のは誤魔化しようのない近距離だった。

どう見ても、ぼっちしお札が光を帯びてたんだもん。

「は、ははは。うっそだー」

無意識のうちに、俺は頬を抓っていた。

これはもしかしたら夢なのかもしれない。そう考えてしまえば、何だか本当にそうだったような気がしてきた。自分が生まれてから育ってきた町で、突然見知らぬ場所に辿り着き、そこで空を飛ぶ少女を見るなんて、現実な訳が無いだろう。

本当は、あの長々と喋り続ける担任の話の最中で、俺は寝てしまっていてここは夢であるに違いない。

「何一人で笑ってんのよ。気持ち悪いから止めてくれない？」

「気持ち悪い……？ 俺からすればお前は気味が悪いけどな」

失礼な。

「捻くれてるわね」

「どっちがだよ……」

どっちが何も、捻くれてるのは俺の方だった。ただ、合っているだけに見透かされているようで少し苛立った。

「言ってくれるじゃない。いつもなら懲らしめてやるところだけど、丁度いいわね。しばらく外の世界（こゝろ）で生きていく必要がありそうなの。食料を調達してくれないかしら」

話は俺を無視して彼女の中で勝手に進んでいた。

「拒否権は……？」

「ないわ」

「んな理不尽な！」

「世間はいつも理不尽よ。そうそう、多分だけど、私がここに来たみたいに、妖怪みたいな人外の化け物共がこっちに来てるかもしれないから気をつけた方がいいわ」

「マジかよ……」

じゃああれか。最近の妖怪とかそういう類の噂は全部本当なのだよ。

くそっ。じゃあ性格はアレっぽいけど、容姿は美少女な巫女さんに会えた俺はまだ幸運だったってことかよ。

吸血鬼なんて冗談じゃねえぞ。

「てゆーか、こっちってどっち？ こっちに来たって事はあっちがあるのか？」

俺が足りない頭で——頭に入ってくるあまりにも非科学的で、現実的で、非常識的な、だけど認めざるを得ない情報の対処に困っているのを気にも留めず、彼女は左手に握ったお祓い棒？ らしき物の先端を俺に向けて堂々と言い放った。

「本当よ。だから、交渉よ。私がこちら側に居る間、ここら一帯の安全は保障するわ。その代わり、生活していく上で最低限必要な物資を私に寄せ」

最後の方は命令形になってるんですけどどうということなんだろうか？

質問は無視されたし。

もっと友好的に出来ないかな、まあ無理なんだろうけど。

「それを人は交渉とは言わないぞ」

彼女の言葉をそのまま鵜呑みにして信じるならば、彼女が居なければ、彼女が干渉しなければ、安全ではないと言った。だが、彼女自身がそうやってしてみせたように、もう俺には非常識を、非現実を鼻で笑うことなんて出来ない。

そして、俺が彼女に施しを与えなければ、その危険を彼女は放っておくと言っているようなものだ。

その言葉は、そう。

「世間はそれを脅迫と呼ぶんだ」

「心外ね。だけど、安全を保証するのは本当よ。私は妖怪退治と『異変』と呼ばれる事件の解決が仕事なの」

まったく悪びれた様子なく言った。

事件を解決するって、探偵みたいなもんか。

ただ、さっきのを見る限り、推理より暴力が目立つ事件解決になりそうだけど。

「だったら何で交渉なんかする必要があるんだよ。仕事だろ？」

「そう、仕事よ。無償で仕事をする人間なんて居ないでしょ？」

「むっ……」

確かに。

その通りだ。

信頼も出来ないし信用も出来ない。

だけど。もし、だ。

仮に、本当に妖怪なんていうものが存在して、人を襲うのをただ日常生活用品を提供するだけで未然に防げるのなら、悪くない交渉どころか、むしろラッキーなのか。

例え嘘だとしても、人が殺される可能性を少しでも減らすのが、今俺に出来る最善の策というやつなのかもしれない。

気付けばそんな思考に至っていた。

「分かった。それで構わない。なるべくお前の要求に応えられるようにするよ」

結局、彼女の言葉に流されるように俺はそう答えてしまった。

「交渉成立ってやつね。話し合いの解決で済んで良かったわね。さすがに何の力も無く、関係もない人間を甚振るのは後味悪いし」

「怖い事平然と言うな！」

あと俺って（物理的に）割とピンチだったのかよ。気がつかなかったぞコンチクショウ。

ゆっくりと地面に降り立ち、彼女は口を開いた。

「博麗靈夢よ。名前間違えたらぶっ飛ばすから、気をつけなさい」

「物騒な……」

霊夢ってより悪夢だよ、お前は。

そんな事を思いながら、かなり久しぶりに業務的じゃない会話をしたなーと軽く感動。

何か、人に自分から名乗るのって恥ずかしい。

高校生になってから、俺は大分シャイになったのかもしれない。

特に痒くも無いのに何となく項の辺りを掻いてから、名乗ることに違和感を覚えながらも口を開く。

「俺は伊佐風悠樹だよ」

すると、博麗は訝しむような表情をした。

その表情をしたのは俺の方である。

お祓い棒で肩をぽんぽんと叩きながら、博麗は言った。

「伊邪那岐<sup>いざなぎ</sup>? 偉い大層な苗字ね。あんたには似合わないわ。改名したら?」

「人の苗字にケチつけんな、お前の一存で改名できるもんか!」

ん? 出来る、のか?

かなりぐっだぐだで、浪漫の欠片を感じたのは目で彼女を最初に捉えたその瞬間だけで、物語としては大分出来が悪いものだったと思う。

ただ、これが夢だったとしても、俺は妖怪の存在を信じたと思う。

まあ、同時に馬鹿にしていそうな自分が居るのも否定はしないけど。

とにかく、それが俺、伊佐風悠樹と博麗靈夢の奇妙な出会いだった。

もし、この後、彼女との出会いを悔いる事が来たとしたら、それは俺の人生の選択ミスというヤツだろう。

俺は、人生二度目の大きな選択ミスをやらかしたのかもしれないし、人生初の大正解を踏んだのかもしれない。

あの時、いかにも怪しい階段を昇ってしまったことで――――い

や、博麗霊夢との、ある意味運命的な出会いによって、悠久であり  
須臾でもある怪異の物語は始まった。

始まって——しまった。



博麗靈夢。

どこか浮世離れたような、不思議な魅力を持った少女との出会いから丸々八時間くらいだろうか。

日は沈み、強豪校の野球部の人間だってそろそろ帰る時間だ。きつと帰ってるに違いない。いや、知らないけど。

ちなみに俺の通う高校の野球部はそんなに強くは無い。

素人だから詳しい事までは分からないけど、甲子園に行けるようなレベルでは無いのは確かだ。

あれから一度家に帰り、色々が必要な物を買って揃えて夕食を食べ終えた俺は、博麗靈夢がこちら側で生活していくのに必要な必需品を持って、例の神社へ向かっていた。

不思議な事に、昇る時はあれほど長く感じた階段は、降りるときはそうでもなく、二、三分ほど歩けばすぐに下についた。

助かるのだが、少しゾツとする出来事だったりする。

取り敢えずタオルやらシャツやらは用意できたけど、パンツとかはマジで勘弁してほしい。この年でそんな所行ってたら、怪しまれるわ。もう街に出歩けなくなるじゃねえか。

「歯ブラシとかもあるし……服も何着か用意できた……文句言ったらぶん殴る」

まあ、人を本気で殴った事なんて一度もないんだけどな。

服は取り敢えず、今流行りの物を適当に買い、パジャマも一応買っておいた。一年間友達ゼロだったから財布の中には一年分のお小遣いがほとんどそのまま残っていたのが幸いした。

まさか、友達がいなかったことを喜ぶ日が来るとは思わなかった。きつと神様も予想外だったに違いない。

ポストンバッグに取り敢えず詰められる物を詰めて、自転車を漕ぎながら片手には、コンビニのサンドウィッチと菓子パンとおにぎりを数種類ずつ。

大食いであれば何日かもつだろう。

好き嫌いとかあったら嫌なので、ジュースはやめにして、お茶のペットボトルを数本用意した。ここまで用意して文句を言われたら……、また買い出しに出るしかないだろう。

いや、しかし。

博麗霊夢を最初に目にした時は、本気で見蕩れていた。

あの瞬間は、本気で彼女を崇拜しても構わないくらい思った。

正直、あの時あの瞬間、俺は彼女に魅了されていたと言っても過言ではないし、物凄く神聖な存在に思えた事も否定はしない。

俺なんかは触れることはおろか、近づくことすら畏れ多いような気がした程だ。

一瞬でも、まるで物語の主人公をやっているような気分だった。

まあ、発言二言目くらいには彼女をいつか負かしてやりたいという気持ちにすり替わった様な気がしないでもないけど。

自転車を漕ぎながら、そんな過ぎてしまったことを考える俺。

それにしても、厄介なことに首を突っ込んでしまったものだ。

科学最先端の時代に妖怪なんていう非科学的な『迷信』でしかない存在が実在するなんて話、昨日の俺なら鼻で笑っていられたんだろうに。

今では笑うどころか、博麗霊夢と出会った時のように唐突に妖怪との邂逅を果たしてしまうのではないかと、怖くて身震いしてしまうほどだ。

博麗霊夢という存在を最初に知れた事は幸運だったのだろうか、それとも不幸だったのだろうか。

彼女を知らなければ、俺はきっと妖怪なんていう見た事も無い存在にびくびく怯える事も無かったのだろう。だけど、彼女を知った

からこそそういった存在に敏感になれたとも言える。

危なくなった時、彼女が俺を助けてくれるかもしれないし。

そして俺は、彼女の生活必需品を提供する。

ああ、素晴らしきかな協力関係。

夜風をその身に受けながら、自転車を漕いでいると、不自然に街灯が点いている場所があった。

逆か。

一本道に並ぶ街灯が一本を除いて全て消えているのだ。

どうりで暗いと思ったんだよ。

そのたった一本だけ灯った街灯の下。

そこにあるモノを見て、俺は目を見開いた。

街灯の明かりで、眩し過ぎるくらいに輝く金髪。白過ぎて、体温が本当にあるのかさえ怪しい白い肌。ドアノブカバーのような特徴的な帽子。綺麗な金髪はサイドテールにされている。十歳前後くらいの少女だ。だというのに、その姿は可愛らしさと同じくらいに美しさも感じる。そんな少女は、まるで舞台のスポットライトを浴びせられているようで、街灯の下で壁に体重を預ける様にして座り込んでいた。

だが、俺は見蕩れていたのではない。

ただ、あまりにも無残な光景に驚かざるをえなかったのだ。

アスファルトの道に多量の血が流れ、血だまりを作り、両腕が引き千切られていれば、誰だって驚くに決まっている。

右腕は、肩口から綺麗にバツサリ。

左腕は、肘から。

どちらも生々しく引き千切られており、人為的にやられたように見えなくもない。

腹部に槍でも貫通でもしたような、赤黒い円が出来ていて、そこから大量の血が流れているのだ。

少女の白い肌が紅い血に塗り潰され、今なおどくどくと流れ続ける。

元から紅かったのであろう服が、血によって、赤黒いドレスへと変化していた。

死んでしまっているのではないかと疑ったが、僅かながらに息があるのは遠くからでも聞えるほどの苦しい呼吸音で確認できた。

「お、おいっ！ お前、大丈夫なのかっ！？」

大丈夫な訳がない。両腕が引き千切られて、腹部に穴を空けて、それでも、うん大丈夫だよ、なんて言われた日には俺はその後どう接すればいいか対処に困る。

といっても、今俺に出来る事なんてないのだろうけど。

焦って、自転車から降りる。

その光景に、あまりにも突然に訪れた状況に、人一人の命が懸った場面に、緊張か恐怖かで膝が笑って上手く動かせない足を何とか前に出して、駆け寄る。

何だよこれは。

どういう状況だよ。

何でこんな時間、こんな場所で死にかけの人間が出てんだよ。

非日常は突然なんてモンじゃねえぞ。

昼は空飛ぶ巫女さんに、夜は死にかけの少女。

非日常的な出来事のオンパレードじゃねえか。

そろそろ本物の妖怪に出会うんじゃないだろうな。

それにしても。

もう九時前とはいえ、誰か気付かなかったのかよ。

これが、妖怪って奴らがやったことなのか？

だとしたら博麗霊夢は何をしてるんだ？

くそっ。分からない。

超ビビり気味、腰を引かせながら、何とか少女に駆け（実際には歩く速さと変わらない）寄ると、それまで死んでいたように動かなかった少女が首を動かさずに、その悪魔のような紅い瞳で俺をじろりと見た。

まるで、今まで俺の存在など気付いていなかったようだった。

その瞳は、俺の事を取るに足らない存在だとも言っているようだった。

相手にするのすら辛いつてことか？

両腕が千切れて腹に穴が空いていては、それも仕方がないというものか。

少女が俺をどんな目で見ようと、そんな事は関係ない。

確かに俺は人が虐められていたってそれを、傷付くのが嫌で見過ぎしてしまいうようなくだらない人間だ。悪行を犯している人間を見たって、怖くて、それを止めるようなヒーローみたいな真似なんて、俺には出来ない。

そんな勇気なんて俺には欠片も無い。

でも、目の前で人が死にかけている。

さすがにそれを見過ぎして、その後の人生をのうのと生きていられるほど俺はクズじゃない。

どこか、熱くなつてたような気がする。

自分が誰かを救っている、それを考えるだけで——こんな俺でも——自分の人生が輝いたような気がした。

一人で何か手応えのようなものを感じていると、彼女は口を開いた。

「あなたは、もしかして人間？」

「そうに決まってるだろ。と、とにかく救急車だ。ちょっと待てる。救急車を今から呼んでやるから！ 死ぬなよ、絶対に助けてやるから」

良く分からない質問だったけれど、きっと気が動転しているんだろう。

そりゃ自分が死にかけてるって時に、冷静でいられるわけがない。それも十歳程度の少女に、冷静な態度を要求するのは酷ってやつだろう。

言って、俺は携帯電話をジープのポケットから取り出す。だが、目の前の状況に、俺も同じく気が動転していたらしい。

指が震えて上手くボタンを押せない。

心臓が高鳴っている。

早鐘を打っていて、うるさいくらいだ。

俺の人生でこんなに心臓が鳴った事なんてあったのか？

あれ？

救急車って何番だっけ。

焦れば焦るほど、頭が回らなくなり、今自分が何をしようとしているのかすら、あやふやになってくる。

あくまで他人事だったのに。

「へえ。飲み物と料理になった姿しか知らなかったけど、人間ってこんな姿をしてるんだ」

「何言ってるんだよ——お前？」

彼女の紅き双眼が、強く、射殺すが如く俺を睨んだ。

気が動転しているせいだと思って、適当に相槌を打っておくつもりだった俺は、真面目になって聞いた。真剣に彼女の言葉を聞きとっておかなければ、なにか拙い気がしたからだ。

そうさせた理由。

それは、彼女のその目に、十歳程度の子供とは思えないほどの迫力のようなものがあったからだだった。

恥ずかしいことに、少なくとも四、五歳は歳がしたに見える彼女に目で制されたのだ。

そして、先程までとは違った、重たくのしかかる声音で少女は言い放った。

「……私に血を寄越せ、人間」

「は……？ 血？ 輸血だな。そうだよな、まずは血が必要……」

「そう。だから、お前の血を寄越せ、人間。お前の首を私に差し出す、それだけでいい」

「へ……？ 一体、お前何を言ってるんだよ」

嫌な予感がした。何やらさっきからこの少女と会話が噛み合っていないような気がする。そもそも、彼女は何で俺のことをいちいち人間と呼ぶんだ？

確かに名前は名乗っていないけど。

だけど、もうちょっと呼び方ってものがあるだろう？

俺のことをまるで自分とは違う種族の者のように呼ぶ。それではまるで——彼女が人間ではないみたいではないか。

「——ッ!？」

そこで俺はようやく気付いた。

彼女は街灯の光に照らされている。

人間、いや全ての物は、光に照らされれば影ができる。なのに、彼女は、この少女は光に照らされていながら、影というものが無い。

金髪は眩しいぐらいに輝き、こんなにも綺麗だというのに。

出来ていなければおかしい影が、無い。

最近この街で流行っている、妖怪とかそういった類の噂話の中にあった——吸血鬼。

多くの妖怪の中で、強力な部類に入る存在だったと思う。

日光に弱いとされたり、流れる水を越えられなかったりとか、事実かどうかは知らないがその強さのせいか弱点が多い。当然ながら人を喰らう。そしてその中でも吸血鬼は人の血を求める。そんな吸血鬼の特徴に、鏡に映らないのと、影が無いというものを聞いたことがある。

鏡に映るかどうかは俺には知る術を持たなかった——だけど。

彼女には、影が無かった。

そして、血色の悪い、僅かに開いた青い唇の中から覗く鋭い牙のような八重歯。

人から直接血を吸うのに必要な鋭い歯。

——吸血鬼。

もしかすると、彼女がそうなのか——？

「まさ、かお前。きゅう……けつ、き？」

否定して欲しい疑問だった。

もしこれを肯定されたら俺は、どうすればいい。

悲鳴をあげて逃げだせばいいのか、それとも救急車を呼んでもらうのか、警察でも呼ぶのか、それとも——助けるべきなのか？

「ああ。そうだよ、フランドール・スカーレット。それが私の名」  
どつと、冷たい汗が流れた。

あと一週間もすれば、四月になるというのに、肌寒さを感じた。  
それはただ単に夜だからという理由では無い。

お化け屋敷や肝試しの時の、妙な肌寒さが、飛躍的にランクアップしたような感じだ。

「吸血鬼ってのは、こんな簡単にぼろぼろなるもんなのか？ 不死  
って聞いたことがあるぞ」

こんなにも足は震えているのに、膝がこんなにも笑っているというのに、地面と足が繋がって一つになってしまったかのように言う事を聞かないのに、俺は、ただ疑問をそのまま口にしていた。

だが、それは決して好奇心ではない。

どんな感情なのかは分からないが、ただそれだけは断言できた。

「血を失い過ぎてな。この程度の傷なら普段は再生に数秒とかからないんだが、ほとんどの力を失ってしまった。だから、我が血肉の一部となれ、人間。光栄だろう？ 人間ごときが私の命となれるのだから。それに——人間と言うのは私達吸血鬼の食料、違うか？」

彼女の俺を見る目は、俺が人間と知ってから何かが変わっていた。違うな。きっと彼女は、最初から俺のことをそういう対象として見ていたのだ。

彼女はきつと、助けてもらう、なんて思っていないだろう。

ここで、俺が首を差し出して血を与えたとしても、彼女はきつと、食料を自分で確保して、勝手に自分で生き延びた、と自分で自分を



救ったのだと考えるだろう。

当然だ。

例えば、とある人物が餓死寸前だったとする。

そんな時に、偶然、食料となる生き物を見つけるのだ。

その人でも殺せる程度に、そいつは弱かった。食物連鎖のピラミッドで、人に捕食される側の動物だった。

それを殺して喰らったとして、その生き物に感謝することなんてない。

むしろその人物は、よくやった、と自分で自分を讃えるだろう。それと、なんら変わらない。

ただ、今回喰らわれるのは、喰らわれることを忘れた、俺達——人間だった。

「どれくらいあれば……いいんだよ？」

献血程度の量だったら、あるいは俺にだってあげることが出来るかもしれない。

殺されるかもしれない、だけど、殺されずに済むかもしれない。そんな考えから出た言葉だと思う。

平和な国に生まれたからこそ出てきた生温い言葉。

「取り敢えずはお前一人分で良い。それで生きていく分には問題ない」

「そ、そうかつ！　って……ッ!？」

あまりにも当然のように言うものだから、俺は一瞬肯定しかけそうになるが、すぐに考え直す。

問題だらけだろうが！

それじゃあ、俺が死ぬ方向に進んでるじゃないか。

大体、なんで俺はコイツを助ける方向で話を進めているんだ？

そして、俺は気付いた。

俺達が、スーパーで牛肉や豚肉を見て何も思わないで、食べ物として見るような、それと同じ目をして俺を見る彼女。

彼女が俺を見る目は、俺達が牛や豚を見る目と変わらないのだ。俺も、そうやって見てきたのだ。

食物連鎖のピラミッドで言えば、彼女らは俺らの上位に在るものなんだろう。

かと言って、死にかけの吸血鬼にわざわざ命を差し出す必要なんてあるのか――？

人間を喰らう捕食者。

吸血鬼だぞ。

人間の敵。

俺が出会った時、つまり、今は弱っているけれど、力を取り戻したら人を殺すかもしれないんだ。

どうせ、こんな状況に遭ったのだからってロクでもないことをしたらさらに違う。

そんな奴、勝手に野垂れ死んでしまえばいいじゃないか。

「……」

俺は自然と、無意識のうちに後ずさった。それは本能。

彼女を助けるべきではないと、俺の『人間』としての本能が告げたからこそ、無意識のうちに起きた行動。

そして彼女は、俺のそんな姿を見ても、動かなかった。

いや、違う。

動けなかったのだ。

既に瀕死に近いから。

それに、動けるなら、彼女はとっくのとうに俺を食い殺していたはずだ。

つまり、彼女は脚が震えて動けない奴すら殺せない程、弱体化している。

なら俺がやることなんて一つに決まっている。  
足が震えて、普段の全力に遠く及ばない速さでも、動けない相手から逃げ切ることなど簡単だ。

なに、俺が彼女の死を引き摺る必要なんて無い。

吸血鬼を『助ける』ことは、正しいか？

むしろ、ここで吸血鬼を、死にかけの少女を見て見ぬふりをする  
ことこそが、『人間』としての英断。

正しい判断。

そうに決まっている。

ここで、死にかけの吸血鬼の命を『見捨てる』ことこそが正義。

ここで、逃げて、救えるかもしれない命を殺すことこそが、  
正義。

そして、俺は目の前の吸血鬼からほぼ絶対逃げ切り、殺す事ができる。

憐れみなんて覚える必要はない。

憎んでもらって大いに結構だ。

吸血鬼は人間を食料としか見ていないのだから。彼女が自らの態度でそう語ったように。

殺せる。

ここで、吸血鬼を見捨てることこそがヒーロー。

魔王を助ける村人Aなんて必要ない、死にかけの魔王に無情の一撃を与えることこそが勇者、ヒーローの役割。

その役目を、俺は与えられた。

だから、同情なんていらない。

彼女が人間一人を喰らう事に何の躊躇いも覚えないように。

俺も同じく、彼女に無情の判断を下し、殺す。

——化物を、殺す。

今回の勝負は行動コマンドを選択すれば確実に勝てる勝負。

目の前に居る吸血鬼をただ見捨てる、それだけでヒーローになれる。

そう思った瞬間、俺は震える足を全力で彼女から遠ざかることに使った。

「え、え？ ……どこに行くの？ 助けてくれないの？ 人間は食べ物じゃないの？ 吸血鬼わたしが食べたい時に好きなように食べれる。人間はそういうモノじゃないの？」

疑問符だらけの彼女の声。

俺が彼女から遠ざかるように足を動かした瞬間、見るものを射殺さんとする程の狂気であり凶器である瞳から途端に力が失われたのが、一瞬だけ見えた。

非情で冷酷で、高圧的だった彼女の声音は、嘘だったように弱々しくなっていた。

その声を聞いて、本当に彼女は、人間を食べる事を何とも思わないような生活をしてきたのだと、簡単に想像がついた。

俺だって同じだ。

わざわざ狩りに出る必要もなく、家に居れば勝手に食事が用意されて、その料理が作られる過程で死んだ動物の事なんて気にも留めない。

現代の人間なら多くはそうだ。

まして、ここは日本だ。

俺は、彼女の声を無視して走りだした。

「……ねえ、助けてよ。ねえ、ねえ、ねえ、ねえ、ねえ、ねえ、ねえ、ねえ、ねえ、ねえっ！！？」

恐怖に駆られた俺は、彼女の必死の——それこそ死に物狂いの声を、振り切る。

「死にたくない。生きたい、生きたい、生きたい、生きたい、生き

たい、生きたい、生きたい、生きたい、生きたい、生きたい」

バックグラウンドミュージックは吸血鬼の悲鳴だ。趣味の悪い。

「助けて、助けて、助けて！ 誰か助けて！」

「う、うわわああああああああああ、ああ、おおおおお  
おおおっ！！？」

俺は気付けば悲鳴だか雄叫びだかよく分からない絶叫をあげて駆けた。後ろからは彼女の俺へ呼びかける声がずっと聞える。

「……………ねえ、助けてよ……………」

そんな声が、聞えるはずもないのに、俺の耳に入ってきた。

博麗霊夢の元に、荷物を届ける。代わりに、妖怪を退治する。

それが彼女との交渉の条件であり、約束だ。

くそっ！ 何が安全は保障するだ！ 全然安全なんかじゃねえじやねえかよ。

幸い、あの無人の謎の神社はここからそう遠くない。

ボストンバックを拾いあげ、気付けば投げ捨てていたコンビニのレジ袋を拾い、自転車を全力で漕いだ。

彼女の声は、いつの間にか、どこの誰に謝っているかも分からない謝罪の声へと変わっていた。

誰か、彼女の声に聞きつけて、彼女を救ってくれるような善人はいないのだろうか。

彼女の声音は、死を目前にして、恐怖する人間の声と大差ないに違いないのだから。

畜生、畜生、畜生……………。

何で、こんなに胸の辺りが痛むんだよ。

あー、もう！ 心の中はもう固まってるんだよ畜生！

流石にあの階段を昇って降りてきてからじゃ遅すぎる。

博麗霊夢には悪いが、麓まで取りに来てもらうことにする。

ボストンバックと食料を地面に叩き付ける。

ちゃんと博麗霊夢はこの荷物に気付くだろうか。

まあ、空を飛べるらしい彼女なら、移動はそこまで苦ではないだろう。

そして俺は、来た道を、全力で足を動かして戻った。

くそっ！

クソッ！

分かってる。分かってるんだよ！

吸血鬼なんて、人間から憎まれるべき怨敵、さっさと見捨てて殺すべきだって。

時には狩られる側が狩るものを討つことだってあるんだ。

助ける必要も、同情する必要さえないことだって分かってる。

でも違うんだよ！

吸血鬼以前に、アイツは死にかけてるんだよ。

俺は、吸血鬼とか人間とか牛とか豚とか食べるとか食べられるとか、そういった事を除いて最初、どう思っただよ！

助けたいと思っただんじゃないのか？

人を苦しめる魔王を殺すのはヒーローの役割だけど、俺は生憎ヒーローじゃないんだよ。

死にかけの吸血鬼を見捨てることは正義なのかもしれない。

だけど、死ぬ事を怖れて嘆き、謝罪して泣きじゃくる魔王に、手を差し伸べる村人Aが居たっていいだろうが。

俺は、金髪の、紅眼の少女――吸血鬼の前に戻って来た。

彼女は、俺が目の前で止まったのに気が付いたのか顔をあげた。

「どう、して……？ 助けてくれるの？」

彼女は。さっきまで人間が自分に命を捧げることこそが当然、とも言いたげに血を寄越せと言っていた彼女は俺の行動を本当に不思議そうな顔をして首を傾げた。

高圧的だったり、見た目相応の態度を取ったり、素はどっちなのか、分かったものじゃない。

目から頬にかけて縦に、水分が乾いてできた、一筋のラインがあった。

緋色の瞳は、溜まった涙によって揺らいで見える。

きっと、俺が去ってから、泣いたのだと思う。

迫りくる死に、運命に絶望して。

首を傾げる姿は、血濡れでなければ姿相応の可愛らしさであっただろう、と思う。

「泣くな！」

だが、次に泣くのはきつと俺だ。

まさか、吸血鬼の為に自分の命を差し出す羽目になるとは、本当、人生はどう転ぶか分からない。

どうして、と理由を尋ねてくる彼女を俺は突き放すよう言った、つもりだ。

「え……？」

「畜生、畜生、畜生、畜生、畜生、畜生、畜生……ッ！」

叫びながら俺は、彼女の前で屈みこみ、自身の首を腕の無い彼女でも咬めるように――、口元に合うように移動する。

思い切り目を瞑る。

首筋を咬まれるってどういう痛みなのか、想像も出来ない。

血を抜かれて死ぬって、どんな痛みが、苦痛が襲ってくるのか想像できない。

とにかく、自分が死ぬとこなんて考えたくも無い。

だから、叫んだ。

叫ばなければ、そうやって恐怖を麻痺させなければ

これから死ぬって時に思い浮かんでくるのは、両親と、今日会ったばかりの巫女――博麗霊夢くらいだった。

我ながら薄い人間関係だ。

そんな程度の人間関係でも、勝手に涙が出てくる。

俺という人間はなんて脆いのだろうか。

両親はともかく、今日出会ったばかりの奴の顔を思い出して泣くとか、どんだけだよ。

思い残す事なんて、浮かんでも来ないのに――、きっと死んだって、家族内とその近所が少し悲しむ程度の波紋しか残さない程度の、その程度の影響しか及ばさない存在でしかない俺なのに、涙が溢れてきやがる。

数秒かもしれないし、数十秒かもしれない。

しばらく、嗚咽を混じえて叫んだあと、俺は言った。

俺みたいになちっぽけな人間の声なんて、彼女の心に響くなんて思えないけれど、それでもそれが彼女の考えを変えてくれるかもしれない。

見当違いな事をしているのかもしれない。

今になって考えてみれば、これは吸血鬼を危険視した博麗霊夢がやったことなのかもしれない。

妖怪退治を、俺達の為にくれたのかもしれない。

俺との約束を守って。

そう考えると、俺はとんでもなく愚かな事をしているのかもしれない。

だけど。

見て見ぬふりなんて出来ないし、知って知らぬふりなんて、俺には出来ない。

死にかけなら、なおさら。

見過ごしてやり過ぎしたって、俺は目の前で、例えそれが人でなくとも、死んだら一生引き摺る。俺は目の前の出来事を上手くかわす術なんて持ってない。

俺は、強くない。



臆病なんだよ俺は。

臆病で、孤独なんだよ俺は。

「な、んで戻って来たの……？」

震えた声で彼女は言った。

そんなことを言ったから、俺はぽつりと、呟くように言った。

「——お前は、孤独だから。きっと一人ぼっちで、悲しいだろうから。そ、そそ、そんな奴を助けるのは……お、俺みたいなの、同じ一人ぼっちの可哀想な奴くらいだろうから」

「どういう……？」

「俺、さ。友達ゼロだから……家族とも上手くいってないから……ッ！　きっと、今のお前みたいに死にかけてても助けてくれるような奴なんて、誰もいないから！　俺には自分の命を優先するくらいの価値なんてないから！　……多分、俺とお前は同類なんだ。だから——だから同類の俺がお前を助けてやるっ」

俺は、理解している。

きっと、目の前の吸血鬼がこんな少女の姿を——人間の姿をしていなければ、獣のような姿をしていたならば、あっさりと見捨てる事ができただろう。

それこそ、捨てられた子猫を見て、可哀想だとは思っても、助けないように。道端で、蛇や鳥の死骸を見つけた時、憐れみなど感じずに、気持ち悪っ、と吐き捨ててしまうように。彼女を助ける事なんて諦めるどころか、考えもせずとその場を去っただろう。

人の言葉を喋りさえしなければ、彼女の絶望した、悲鳴のような聞いていて心に突き刺さる叫びを聞かなければ、或いは『見捨てられた』かもしれない。

理論的には可能だけど、物理的には不可能なのと同じなんだ。

頭では分かっている、吸血鬼を助けようとするなんて、それも自分の命と引き換えになんて本当にどうかしてるって。

だけど、『見捨てる』事なんてできない。

俺は『弱い』人間だから。

学校で係や委員会を決めるときだって、自分で決断できず、皆が避ける面倒な仕事を毎回流されるがままに押しつけられて後で後悔するくらいだ。

したいことがあっても、嫌われるのが嫌で、自分が傷付くのが嫌で、他人に譲ってしまうくらいだ。

どうしようもないくらいに我を通す事が出来なくて、自分の意思を貫くことができないから。

勘違いするなよ。俺は人が良いんじゃないんだ。他人を想っているわけじゃないんだ。

ただ、単純に臆病なだけ。

弱くて臆病で、そのうえ——一人ぼっちだ。

「助けてやる……そのつもりで来た」

彼女は俺の言葉をどう受け取ったのか、しばらく無言だった。

もしかしたら、彼女は、俺の言葉をどうとも思っていないのかもしれない。

食料が何か言ってるや、程度にしか捉えていない可能性だってある。

感情的になって言った言葉だ。

耳を傾けても、意味が理解できなかったかもしれない。

そりゃそうだ。

俺だって自分で何を言っているのか分からなかったんだから。

言いたいことがあるのに、それを言葉にする術が無い。

少し、悔しい。

「だから、血を吸え！ 不味くたって文句は言うなよ！ 俺は吸血鬼の為に生れたつまりなんて欠片も無いからな！」

俺は想いのまま叫ぶ。

死への恐怖から逃れるために。

目の前の恐怖に自身を奮いあがらせて、一時的でも恐怖を緩和できるように。

「大事に飲め！ 俺の命を全部お前に預けてやる！ だから、一滴もこぼさずに全部飲みきって……絞りつくせ！」

「うん……うん、うん」

俺の一言に、泣きながら彼女は頷く。途中からとっていた高圧的な態度は、まるで仮面だったかのように剥がれていた。今の姿を見れば分かる、これが、この子供のような姿と態度こそが彼女の本来の姿なのだ。

きっと彼女は俺なんかより素晴らしい生を歩むだろう。

だったら、俺なんかの命より、彼女の命を優先すべきだ。

俺の人生は、高校生の中でも最低辺に近い毎日を送っているだけの美しくも綺麗でもない人生だ。

そんな人生を必死で守る必要なんて——ないだろう。

そして何より、彼女は吸血鬼——俺なんかよりずっと上位の存在のはずなんだから。

「さあ、吸え！ 出来れば痛くないように！」

出てきたのは、我ながら情けない一言だった。

「それは、出来るかどうか分からないけど……いいの？」

「……！？」

そんな風に聞くなよ。

今更ながらに決心が揺らぎそうになるじゃないか。

「良いわけないだろうがっ！ だけど、——だけど！ そうしないとお前が死んじゃうんだろうっ！？」

最初は俺から血を吸って殺すことなど気に病む様子すら見せなかった彼女は。

そんな彼女の……フランドール・スカーレットの表情は、俺が生まれてから見てきたどの笑顔よりも儚げで優しく、美しく、可愛らしい笑顔だった。勝手な推測だが、こんな言葉、彼女は他人に生まれて初めて使ったのではないだろうか。

「ありがとう……」

一瞬だけ気を抜いてしまった。

その次の瞬間、首筋に激痛が走った。

訳が分からなくなってしまうが、激痛が数秒続いたことで、ようやく彼女に首を咬まれたことを自覚するに至る。

くそっ。死にたくない……。

絶対に、次の人生はうまくやってやる。素で正しい道を歩む事が出来て、我を通す事に何の疑問も抱かないような、どんなに憐れな奴でも、それを悪だと認識したら容赦なく叩き潰せるような、そんな意思の強いヒーローみたいな奴になってやる。

そんな、次の人生を歩む頃には忘れていそうな決意を固めた瞬間。激痛のせいか、それとも血液が一気に吸われてしまったせいか、一気に意識が薄れていく。

視界が霞み、平衡感覚があやふやになった。視界の霞みに揺らめき加わる。俺の血を吸う金髪の紅眼の吸血鬼——フランドール・スカレットの横顔を、朧ながらも何とか眼球だけを動かして視界に捉える。

あーあ、本当にくだらなくて、ちっぽけで、何の面白味もない人生だったな。

そんな思考に辿り着いた瞬間、俺の視界はフェードアウトし、意識は闇の中に消えた。

こうして俺の、伊佐風悠樹の人生は、本当に唐突に終わりを迎えた。

———終わりを、迎えてしまった。

## 01（後書き）

あらすじをどう書いていいのか分からない……。あれって下手するとネタバレになりませんか？ どの程度までを書いていいのか、どんな風に書けば、らしいのか知りたいなー、なんて思っています。

唐突に意識が戻った。

まるで、長い眠りから醒めたように。

しかし、視界が真っ暗だ。

もしかしたら、ここがあの世と言うやつなのかもしれない。

なんとなく、朝、目を覚ましてベッドから起き上がるように、存在するはずもない体を動かすように動かす。

すると、驚いたことに視界が開けた。

——いざなぎは いきを ふきかえした。

ただ瞼を閉じていただけだったらしい。

少し恥ずかしい。

一瞬本当に生き返ったような気がしたんだよ、仕方ないだろ。

「……どこだ、ここ」

もしかしたら夢だったのかと思った。

あの出来事は全て夢で、博麗霊夢なんていう美少女系巫女さんなんて、彼女いない歴〃年齢の哀れな男子高校生の妄想の産物で、フランドール・スカーレットなんていう死にかけの吸血鬼——妖怪なんて、漫画の影響を受けて生まれた、ちよつとした中二病的思考が夢に反映されただけだった。

たった、それだけの話。

夢が無いとは思うけど、虚しいながら、なんという説得力のある話だ。

しかし、目が覚めた場所は、見知らぬ天井だった。

入院して病室だったなんてわけではなくて、本当に知らない、廃墟のような場所だった。俺が横になっていた場所は、部屋のベッドの上では無く、冷たい地面だった。

もしかしたら、道の上でも寝てしまったのだろうか。

まあ吸血鬼に血を吸われて死んだ、なんて話よりは幾分以上にマシだ。

これで希望も見えて来た、はず。

家族がそこまで心配しているというわけでもないだろうけど、家に帰れば日常だ。あれら全てが夢だとすれば、今日こそが終業式となるのだけれど、まあ一日くらい学校休んでもいいか。

どうせ、昼には学校も終わるんだし。

なんだか、急に現実に戻ってきたような感覚を俺は得る。怖くて仕方のない非日常的な出来事から解放された安心感と、あの出来事全てが、幻想だったというなんとも言えない虚無感。その両方が同時に俺にやってきて、やはり、何とも言えない気分になる。

「博麗霊夢の件までだったら、現実でも良かったのになー」

夢だったからこそ、幻想でしかないからこそ言える事ではあるけれど、俺はそう呟いた。ああいう出来事は、客観的に見れば喜劇だから。それこそ、少年漫画のような展開だったからね。

結局は全て夢だったんじゃない？

そんな事を思いながら、俺は自分のすぐ横に手を置いて、立ち上がろうとする。ここがどこだか分からないけど、それだけに早々に立ち去るべきだろう。

家に帰ればいつも通りだ。

しかし、そんな希望的観測とも言える考えは、俺のすぐ隣から聞える可愛らしい寝息によって打ち消された。

さっきまでは、やはりなんというか、緊張感の糸が切れていたとでも言うのだろうか？

まったく言っていない程に何も耳に入ってきていなかった音が、現実を認識して、落ち着きを取り戻した瞬間俺に聞えてきたのだ。

いけない。

俺は、本能的にそう思った。

隣に居る、可愛い寝息を漏らす、その誰かの姿を確認してしまつたら、もう戻れない。現実に戻つて来たという俺の思考こそが幻想だと、嘘だと、そう証明させるだけの存在が隣に在ると、本能的に思わされた。

なんとか、驚き焦って隣へ向き直るような愚行をすることだけは止める事が出来た。

見なければ、大丈夫。

何も知らず、見ずに居れば、元の生活に戻る。

見て見ぬ振りと知って知らぬ振りが出来ないのと、端から見えない知らないでは意味が違ふんだよ。

博麗霊夢に会ったことも、それによって証明された不可思議な存在――妖怪が本当に居るということもフランドール・スカーレットとかいう吸血鬼に血を吸われたなんてことも、全てが嘘であると。だけど。

俺は、見てしまった。

できるだけ顔を動かさずに、眼球だけを動かして。

子供が、怖いと、ビビると分かっているのに、顔を隠しながらも覗くようにしてホラー映画を見てしまうような、そんな感じで。

怖いと分かっているのに見たくなくなってしまふ。見たら後悔すると言うのが分かっているのに、見たくなる。

ある意味の真理である。

なんで見てしまったかなんて、俺には分からない。

現実がどうのこうのなんて考えている俺は、実は心の奥で、非日常を追いかけてるのかもしれない。

まったく映えない毎日、友達ゼロ状態の孤立した人間関係、ただただ安全で平和なだけの日常に実は飽き飽きしているのかもしれない。



それとも単なる人間の愚かな、人の障って欲しくないトコロに喰らいつく好奇心か。

案外、頭の中がお花畑なのかもしれない。

見てしまった今となっては、どちらでもいいか。

俺が眼球だけを動かして、視界に捉えたのは、やはりというか何とというか、金髪の少女――吸血鬼、フランドール・スカーレットだった。

どうやら、血を吸った事で一命は取り留めているらしい。

引き千切られた腕も、多分元通りだし、腹からも血は流れていない。

少し安堵して、彼女の姿を視界に捉えると同時に、彼女に血を吸われた瞬間の光景がフラッシュバックする。

フランドール・スカーレットの横顔、俺が意識を失う直前に見たモノが、死を決して、命を賭して、代わりに見えたものが、ここはまだ在った。

俺は、彼女の姿を確認して、今更かと思いつながらも、念のためにあるモノを首に手を当てて、確認した。

首筋の辺りに指を這わせて、辿っていくと、そこには彼女につけられた傷跡が――鋭い歯に咬まれた跡が残っていた。

肉が抉れたりしていて、激痛が走ると予想をしたけれど、触っても特に痛みは無かった。

血は抜かれたはずだ。

なんで死んでないんだろう？ 俺。

しかし、どこか分からないけど、電気も点いていないってことは、なんかの建物の廃墟なのか？

それにしても、よく見える。

電気が一切点いていないのに、日がちっとも差してこない暗闇なのに、そんなに暗く感じないのだ。

手元どころか、部屋の隅々まで見渡す事が出来るくらいだ。

「おい、起きてるか？」

起きていないことを祈りながら、俺は彼女――フランドールに軽く声を掛けてみる。

すると彼女は、漫画でよくありがちな一言を――。

「うーん、あと五年……むにゃむにゃ」

「まさかの年単位!？」

――返してくれなかった。

思わず大きな声で冴えないツツコミを放った俺は、隣で気持ち良さげに寝ている彼女の姿を見ながら、俺は一つ決心する。

「……よし」

俺は、隣で眠る吸血鬼を起こさないように、ゆっくりと、物音立てないように立ち上がる。

さつさとここを立ち去る。ばれないように。

それが俺の目的だ。

願わくば、本当に五年程寝ていて欲しいものだ。

ここまで運んできてくれたのであろう彼女に、感謝をするべきなんだろうけど、それでも吸血鬼相手にまともに付き合っていけるわけがない。

逃げる、と言う表現が正しいと思う。

ここまで関わっておいて逃げるなんて、なんというヘタレ。

自分でもそう思うのだから、もし俺のことを見ている第三者が居るのだとしたら、俺のことを馬鹿にして笑っている事だろう。嘲笑とでも言うのだろうか。

だが、無駄だぜ。こちとら、そういうことにはもういい加減慣れてきたんだよ。

もう二度と他人の為何かに命を賭けてやるか、中途半端な救いなんて、相手も自分も不幸になるだけだよ。

そんな中途半端しか出来ない俺には、ここら辺で身を引くのがお似合いだろう。

フランドール。スカーレットという吸血鬼の為にも、博麗霊夢の為にも、そして何より、俺の身の為にも。

明かりの無い部屋を出ると、廊下のような通路があった。夜なんだろう？ 窓からは一切日が差してこない。ちょっとした違和感を感じるけど、そこまで気にすることはないと思う。

大量の血液が奪われたんだ、長く気を失っていたって不思議じゃないだろう。医学については素人以下だから詳しいことは分からないけど。

通路を奥まで歩み進めると、階段があった。

そこにも窓はあるけれど、やはり日が差していない。

どうやら本当に夜らしい。

春休みをだらだら過ごす時間が減ったじゃないか、くそっ。

電気一つ点いていない、真っ暗なはずの階段を降りる。夜で電気が一つも点いていなかったら、階段の一段一段を見ることは難しいと思うのだが、どうやらそうではないらしい。

なんたって、俺には、足元が普段と変わらないくらいに鮮明に映って見えるのだから。

俺は階段を降りて、一体ここがどこら辺なのかを確認するために、家に帰るために建物を出て、外に出た。

「……ッ!？」

そこには驚くべき光景が広がっていた。

別に異世界になっていたわけではない。ドラゴンみたいなモンスターが行き交うファンタジックな世界でもないし、人の気配をまったく感じさせない辺境の地でもないし、世紀末な世界でもない。

見覚えが、なくもない至って普通の場所だ。

ちなみに俺が出てきたどことも知れぬ建物は今になって思えば、ああ、そう言えばここにこんな建物あったのかもしれないな、みたいな感じだ。まあ発見したからこそ言えるんだけど。

だが、そんな何一つ変わり映えのしない街に、大都会でも、田舎でもない普通の街に、大きな大きな誰でも一目で分かるほどの異変

が起きていた。

「空が……紅い？」

思わず一人でに眩いてしまったが、空が、紅いのだ。

正確には、紅い霧のようなものが蔓延しているのだ。

不気味である。

環境問題なんかが、よくテレビなんかで持ち上げられてるけどまさかここまでヤバくなっていたなんて……。

まあ、そんな茶番は止めにして。

俺は携帯電話を取り出して、時間を確認する。

驚くべきことに、もう既に二日という時間が流れていた。そして、今は夜では無く、昼だった。二時である。真昼間である。

なのに、日は一切差してこない。

紅い霧が、太陽の光を遮ってしまっているのだ。

そのせいか妙な肌寒さを感じる。

季節のせいかもしれないけど。

とにかく、探索するべきだろう。

そう思って、少し歩いて見えてきた街並み。そこで、一つの違和感を感じ取る。

さっきまでなら、なんら不思議ではない事だった。

しかし、今が、昼だと言うなら話は別だ。そして今日は休日である。

「人が、誰も居ない……」

がらん、と擬音でも聞えてきそうな街並み、光景だった。

街の中でも多くの高い建物が並ぶ場所に近い、この地域。色々揃っているため、人がよく集まるのがここなのだけど。

見事なまでに誰も彼もが居なかった。

あの建物とその一帯は、丁度、その境目の地域になる。

比較的都会側のこの地域は（まあ、都心とは比べられないだろうけど）昼には、俺と違って毎日が充実している奴らが友達同士で、ここら付近を通ったりするものだ。色んなものを見て回ったりする

にはもってこいの場所と言うわけだ。

かく言う俺も、中学の時はここら辺を通って、駅前の方へ遊びに行ったりしていた。

つまり、そんな場所に誰も居ないということ、それこそが異常だった。

俺にとっては、紅い霧なんかよりも、ずっと危機感を覚える光景だ。

この紅い霧が原因なのか？

俺は、とにかく歩いた。

まるで、俺一人が街に取り残されたような気分だった。どこへ行っても人はおらず、外には人の気配がまったくくない。

「どういう状況なんだよ……」

一人ぼやきながら、俺はひたすら歩く。人を追い求めながら、人影がないかと探しながら。ただただ歩く。

歩いてる途中で、急に胸が締め付けられるような気分になった。

孤独というものを、強く感じたからだろう。

高校に入ってから、日常的に、一人で過ごす時間しかなくなり、孤独だと、痛いヤツだと自分でも思っていた。だけど、本当の孤独というのは、こういうものなのかと思わされる。

気付けば涙が、目元に溜まっていた。

おそらく理由は単純に恐怖からだ。

本当の一人ぼっちという事実が、俺のただでさえ脆い心をいつも簡単に打ち砕きやがった。

高校生になって情けない、と思うかもしれないけれど、本当に一人ぼっちだと誰だっけこうなるに決まってる、と俺は思う。多分……。あいあむれじえんど……。

俺に居るのはいつ俺を食い殺すか分からない吸血鬼だぞ。人生本当に理不尽だわ、くそっ。

「あいつは、どうなってるのかな……」

そんな中、やっぱり頭に浮かぶのは、こういった事態を未然に防いでやると約束した博麗霊夢だった。彼女もやはり、街の皆と同じく消えてしまったのだろうか。

まさか、自分に不可思議現象を見せつけてくれた張本人が姿を眩ますとは。

もしくは、そうせざるを得ない状況にでも陥っているのか？  
ちくしょー会ったら文句言ってやるからな。

てゆーか、俺の常識を覆す出来事の連続の後、目を覚ましたら今度は街規模で異常事態が起きるとかどういことだよ。  
どこに以前までの謙虚さを捨ててきやがった。

誰かに聞かれてると嫌だったので、あくまで心の中で文句を言う俺。突然の出来事の連続で、未だに俺の頭はついていてないような気がする。

まあ、こんな非日常的で、非科学的な出来事に脳みそが対応できるようにになったらもう末期だけだな。いろんな意味で。

何か当てがある訳でもなく、歩いていると、人影を見つけた。  
決して大人数でなく、たった一人だった。けれど、俺はこう思った。助かった、と。

一人じゃないと思うだけで、救われる。

そんな事を俺は思う。

一人より二人、二人より三人、三人より四人、四人よりいっぱいってな。

「おーい」

次にする行動を考えるまでも無く、俺は気付けば、その人影に駆け寄って、声をかけていた。肩に手をぽん、と乗せてこちらの存在に気付かせる。

「なあ、君も一人なのか？　俺は目が覚めて気付いたら街がこんな感じで、良く分からないんだけど、何があったか知ってるか？」

丁寧な口調より先に出たのは砕けた喋り方だった。どんだけ人に飢えてんだよ俺は。

俺が肩に手を置いた人物は――日本人ではなさそうだった。髪の毛は金髪だ。それは染めたものではなく、遺伝的な生まれながらの髪の色だと、見た感じで何となくそう思った。

こんな日の、こんな時間帯の、こんな場所だというのに、その少女の黒系の服は、西洋の方の服を思わせるような、日本のこの街には不似合いな格好だった。

ちなみに金髪にはリボンが巻かれている。

話しかけてから、相手の外見にようやく気付く。

しまった、と思う。

日本語通じんのか？　この子。

しかし、そんな俺の心配はすぐに掻き消されることとなった。

俺の声に反応した少女が、振り向いた。

返ってくる言葉を数通り予想してはいたが、彼女から出てきた言

葉は、そのどの予想からも遥かに離れたものだった。

「……あなたは――食べてもいい人間？」

「は――、い？」

その言葉を聞いた瞬間、時が止まった様な気さえた。背筋にゾクリ、と悪寒のようなものが走った。気持ちの悪い汗が、一斉に流れ始める。誰か居る、俺は一人では無い、そんな淡い希望を打ち碎かれたような気がした。

「何言ってるんだよ？　お前。冗談でもそう言う事は言うもんじゃないぞ、こんな時に」

頼む！　嘘だって言ってくれ。この状況に怯える哀れな奴を脅かそうと思って言ったんだって。悪戯心がちよっと働いて言った出鱈目だって。そう、言ってくれ。

だが、俺の声は震えていた。

「あれ？　もしかしてあなたは人間じゃないの？　そう言われれば人間の臭いが強いくせ、それ以外の臭いがするわ」

「何じゃそりゃ」

「あと、ぼっちの臭い」

知るかよ。俺は生粋の人間だわボケ。まともな受け答えが出来ないということは、こいつもフランドールと同じ妖怪ってやつなのか？　「まあいいわ。気付いたら知らない場所に飛ばされて、食料が無くて途方に暮れていたから丁度良かったわ……」

そう言い終えると、少女は両手を大きく広げた。

両手を大きく広げた少女の姿は、意識してやっているのかは分からないが、十字架に磔にされた罪人を思わせる、そんな動作だった。そして少女は、少女らしくない、少女らしさも可愛らしさをどこかへかなぐり捨てて、狂氣的にその口元を歪めた。口元が裂けたような笑みは、獣が獲物を狩るときの獰猛さを、殺すという殺意を一切包み隠さず表現していた。

その姿を見て、俺、伊佐風悠樹は気付かされた。

自分が、本当にどうしようもない馬鹿なのだと。

少し考えてみれば、分からないわけがなかった。

ここはもう自分の知っている、安全と平和に満ち溢れた世界なんかじゃないということを。博麗霊夢の存在とその口から、誰よりも逸早くそのことを知らされていたではないか。

そして、その後に現れた吸血鬼。

目が覚めると、街中に撒き散らされた紅い霧。

ほぼ百パーセントこの紅い霧は妖怪の仕業。

自然現象で起きるなんて到底思えない。

妖怪が本当に存在すると言う話を知っていて、その後に本物の吸血鬼を見ておきながら、きっと誰よりも異常に気付いていながら、どこか楽観視していた。

妖怪が歩き回る世界なんて想像もできなくて、俺の知る現実とは



かけ離れ過ぎていて。

確かに一人で寂しかったのもあるのかもしれない。

だけど、それ以上に、目の前の妖怪の――少女の姿を見て、違和感を感じなければいけなかった。

真っ先に疑うべきだった。

気付いた時には――遅かった。

「いただきます」

背を向けて全力で逃げたい。

なのに、足が竦んで動けない。

目の前のどうしようもできない恐怖。

「ひっ……ッ!？」

フランドール・スカーレットの時に、多少は慣れたかと思われた感情だった。

あの時は謀らずとも、俺が動けないあの小さな吸血鬼を助けた。ただ、目の前で誰かが死ぬのが堪えられなくて、格好良く言えば目覚めが悪いから、格好悪く言えば、怖いから、その事をずるずると引き摺ってしまいそうだから。

自責の念に駆られるが嫌だったから。

単純に俺の意思が弱く、臆病だったから助けた。

しかし、あの時そんな風に立ちまわれたように見えたのは、一重にフランドールが動けなかったからだ。あの時フランドールがただお腹が空いていただけだったら、俺は吸血鬼の命を繋ぎ止めた人間という立ち位置ではなく、ただの食料として人生の幕を閉じていたに違いない。

そして、今の状況こそがその場合だ。

あの時、偶然に救われたのは、フランドールでは無くて俺の方だ

ったのだと、今になって気付いた。

フランドールと同じ髪の色 of 少女——妖怪が、襲いかかる。

疎まれ、敬われ、憎まれ、畏れられ、嫌われる、人間より上位の存在に対し、恐怖で膝から力が抜けて、がくん、と折れる。

視界が揺れた。

まるで夢の中で誰かに追いかけられているような気分だった。足が異様に重くて、走っているのにまるでスピードが出せない、そんな感覚。

そして。

「く、来るな！」

全力で逃げるべきだと分かっているにもかかわらず、逃げられない！

金髪の少女は不気味に口元を歪めた。

直後、恐怖の所為で動かすべき足を動かせずにいた俺の左側の視界が光を失った。

急に視界が狭くなったのだ。

左側の景色が、真っ暗闇になってしまった。

視力検査で片目を隠している感覚とはまた違う。あの、真っ暗な中でも何かを視ている感覚では無く、本当に左側から視覚が奪われたのだ。

戸惑う。

何が起こったのかを把握できずに、口を開閉させる。

残された右側の視界が、少女の伸びた腕を捉える。

その伸びた腕は、俺の方へ伸ばされていた。

そう、丁度、俺の左側の顔の————ッ！？

「ぐう、ああ——がああああああああああああああああ  
あッ！！？」

激痛。

そして知った。

挟られた！

俺の、左目が――ッ！

痛いなんて感覚を感じるまでも無く！

当然のように。

いとも簡単に。

そして、ずぶりという音を鳴らして、彼女は俺に向けて伸ばした腕を引き抜いた。その指先は血が絡みついており、何か糸のようなものが伸びた丸い物体を摘んでいた。

そう、眼球のような――

「うえ！？　おうえええええええっ！？」

嘔吐した。

しばらく何も食べていなかったせいか、吐いたのは全てどろどろとした黄色を帯びた液体だったが、逆にそれは気持ち悪さを演出し、それを見てまた、胃液の混じった吐瀉物を地面に落とす羽目になってしまう。

そして抜きだされた眼球と、嘔吐物を視界に写す事でまた、吐き気を催す。

左側の頬に、どろどろと気持ちの悪い液体が流れているのを感じる。

おそらく血だけでは無いのだろう。血に涙とか他の液体が混じっているに違いない。

俺が何とか、吐き気を抑えるように、意味も無く手を当てている間に、彼女は俺の眼球を愛おしそうに喰らった。

珍味でも食らうように。

なんでそんな美味そうに食ってんだよお前……それは俺の――。何をしようとしたのか、俺は目の前の妖怪に向けて手を伸ばしていた。

そこまで考えると、一気に胃から嘔吐物が込み上げてくるのを感じた。押さえる事が出来ずに、そのまま吐きだす。

カニバリズムの人間でもなければ、こんな事はしない。

猟奇殺人犯ってやつか。

だけど、普段俺達がやっているのは、まさしくこういう事なんだろう。

妖怪にとって人間は食料。

知ってはいたものの、それを実際に目の当たりにするとでは、恐怖の度合いがまるで違った。百聞は一見にしかずなんて言葉を言っただ奴はどこのどいつだ。まったくその通り過ぎて、褒めてやりたいくらいだ。

「あ、ああ、あ……」

そして今度は俺の意思に関係なく、殺される。

人が獣を狩るように、獣が獲物を狩るように。食物連鎖のピラミッドの通りに。

抗いたい。

逃げたい。

死にたくない。

生きたい。

食べられたくない。

平和に生きたい。

安心に安全に生きたい！

もう一人だって良い！

一生孤立していたって構わない！

プライドなんて捨てるから、恥なんて幾らでもかいてやるから、

何でも譲ってやるから、頼むから、命だけは！

————助けてッ！

ただ念じた。

そんな俺の念が神様か、それとも単に体が恐怖より生きる本能を優先したのか、俺の脚に力が戻り、吐瀉物を撒き散らしたアスファ

ルトの地面から立ち上がった。

「う、ううううう。わあああああああああッ!?」  
振り返るなんてこともせずに、ただただ逃げた。

全力で。

ペース配分なんて気にせずに、ただ今を生き残るために脚にある  
全ての力を使う。

前へ前へと足を出す。

無くなった左目があった場所を左手で押さえながら。

両目から流れる液体が滴っていくのを、感じながら。

視界がぐちゃぐちゃになっていて、何がどこにあるのかすらよく  
理解しないまま、全力で走る。

どこをどう走っているかなんて分からない。どこをどう走って来  
たかさえも覚えてない。

だけど、止まれば殺される。

それくらいは理解出来た。

素人でも分かっってしまうほどの、食欲<sup>さつゐ</sup>が俺の背中に突き刺さる。

あの妖怪は俺を諦めていない。俺を喰らう事を。

諦めるわけがない。

だって、周りに人間がいなくて、獲物は一匹しかいないのだから、  
一発逆転を狙われる事も無いのだから。

畜生。畜生。畜生。

何で俺ばかり。何で、何で、何で!

言っても仕方がない不満を心中で叫びながら、建物と建物の間を  
縫って走りまわる。そんな風に走り続けて、次の左の角を急角度に  
曲がると、入り組んだ建物の間から開けた場所へ出てしまう。

出て、しまった。

「……ッ!」

焦って後ろへ引き返そうとする。

しかし、引き返せない。

引き返そうとしても、おそらくあの妖怪とぶつかって、食われるのがオチ。

「しまっ……うう」

弱々しい情けない言葉が口から漏れる。

単純なスピードで人間に妖怪が勝てるわけがない。

まして、こっちは地面を這いずるように走り回っていて、向こうは空を飛んで追いかけてきているのだ。

終わった。

どれくらい走ったのかは見当もつかないけど、そう思った瞬間、脚から全ての力が抜けて、膝から崩れ落ちた。

同時に、金髪の妖怪が空をふよふよと飛びながら、俺の前にその姿を現した。

角を曲がり違って捕まるなんて間抜けな死に方だよ、まったく。

最後の最後までヘタレで終わるのかよ——！

もう、いいか。

「助けて……」

無意識に、俺の口から出た言葉は、俺の思考とは真逆の言葉だった。

助けて、だってさ。

なに都合の良い事言っただよって話だよな。

今までロクに誰かを助けることもしなかったくせに、自分が苦しい時はそう言うのかよって、そう思うだろ。

自分なのに自分じゃ無い気がした。

俺に振り掛かろうとしている出来事を、俺はもう他人事のようにしか見られない、見たくない。

現実逃避ってやつさ。

目の前の妖怪が憎たらしい笑みを浮かべて、まるで、こちらの恐怖を煽るようにゆっくりと、一步一步を踏みしめるように近づいて

くる。

そして気付く。

この一步一步が命のカウントダウンなのだ。この距離がゼロになったとき、伊佐風悠樹と言う一人の人間に死が訪れる。

その姿を、俺はどんな風に、どんな姿で見ているのだろう。

鏡でもあったら、見てみたい。

きっとそこには魂でも抜けたように、少女を見上げる俺の無様な姿が映っていることだろう。

そして気付けば、俺の口はこんな言葉をぬかしていた。

「助けて、くれよ……、——」

金髪の妖怪がこちらに伸ばそうとした腕が、弾かれた。

上空から、淡い紅の光を帯びた、ビームライフル的な演出で御札が放たれ、それが金髪の妖怪に直撃し炸裂したのだ。それには見覚えがある。間違はなく、初めて俺に非科学的現象の存在を見せつけてくれた少女の攻撃だ。

なんつータイミングで来てくれたよチクショウ！

性別が逆転してたら惚れてたぜ。

「そいつから離れなさい！」

御札を両手に構えながら、その少女は叫んだ。

遙か上空からの、声だった。

「——ッ！」

その言葉に、俺の身体はいつもの何倍以上にも感じるスピードで反応して後ろへ全力で走って離れる。

一秒も経たぬ内に、金髪の妖怪が居る地点に銃弾の如く光弾と化した御札が降り注がれる。

一切の反撃を与えぬ理不尽さだった。

金髪の妖怪も、応戦しようと自身の身体の周りに光弾を形成するが、放つ前に博麗霊夢の御札が全てを撃ち落とす。

そして、無防備になったところに御札を容赦なく放つ。

紅い光を帯びた御札の弾幕は、現代の銃と同じく、敵を破壊するための銃弾と変わらないのに、美しささへ備えていた。

ただ相手を破壊する事より、華やかさを優先し、演出する。

それが幻想郷での決闘方法。

———弾幕ごっこ。

途中から、殺される側だったはずの俺でさえ可哀想に思えてくれるほどの量の御札の弾に撃たれ続けた

妖怪は、気付けば姿を消していた。

存在が消滅したのかもしれないし、あるべき場所へ戻ったのかもしれない。

狙われていた俺が言うのもなんだけれど、後者であることを切に願う。

妖怪とは言え、死んでいい奴が居るわけがないのだ。死ぬべき奴は居ても、死んでいい奴なんて居るわけがない。

格好よく言えば、目の前で誰かが死ぬのは目覚めが悪いってヤツ。醜態を晒しといてどの口が言うかってわけなんだけどさ。

そんなわけで、俺の命の恩人である博麗霊夢は、本当に呆れたような顔をして、至極面倒くさそうに口を開いた。

溜め息の一つでも吐きたそうな顔である。

「あんたは自殺願望者？ 何の力も無いくせに妖怪に近づくなんて正気を疑うわ」

「自殺願望なんてあるわけないだろ！ 大体どうやって妖怪と人間なんて見分けるんだよ？ 言動を見て聞いてやっと分かる位なんですけど」

ぜひご教授していただききたいものだ。



「え？ 見分けないの？」

博麗霊夢は心底驚いたような顔をして聞いてきた。

そんなリアクションされても困る。

「じゃあお前はどうやって見分けてるんだよ」

ちよつと苛立たしかったので、少し強めに言う。

「妖気とか妖力とか魔力とか霊力とかに決まってるじゃない。あと外見と勘」

「俺はその手の人風妖怪一家の孫でも子供先生な魔法使いでも死神代行でもないから無理だ。あと勘はどう考えてもお前の固有スキルだろ」

俺だってそんなモン使えたらさっきの妖怪から逃げてないだろ。

あと、フランドールにしてもさっきの妖怪にしても外見は普通の人間と変わらないか？

「……って言うか、あんた。何でそんなに目の辺り血だらけなの？」

うわっ！ 何この子。折角人が忘れようと現実逃避していたのに、あっさりとその片鱗に触れやがったよ。

「……見りゃ分かるだろ。食べられたんだよ」

自分で言っただけ違和感バリバリの一言だった。まず日常生活中では使いそうにない。

「はあ？ あんたこそ何言ってるのよ。どっちの目も無事じゃない」  
馬鹿らしいとでも言いたげに博麗はそう指摘した。

は？ え？ あれ？

本当だ。いつの間に、ていうかどうやって？

どゆこと？

左側の視界が戻っている。驚いて瞼を閉じて指を軽くあてがうと、確かに感じる眼球の感触。

でも、あの時俺は、間違いなく眼球を抉りだされたはずじゃ。

戸惑い首を傾げる俺を余所に、博麗霊夢は口を開いた。

「あとさ、気になってたんだけど……」

それと同時に、博麗霊夢の雰囲気が変わったような気がした。

そう、言うならば、妖怪退治を専門とする者の纏う雰囲気。

友好的とは言えないけど、何となく気の許せる人物だった博麗霊夢。

和やかとは言えないかもしれないけど、俺にとってはとても救われたような気さえする会話だった。

しかし、そんなムードはどこへ消えたのか、次の瞬間には博麗霊夢が、一度目に会った時と同じように御札を右手に数枚持ち、左手に持ったお祓い棒を俺に突き付けるようにしながら、敵意を忍ばせず言葉放った。

「————何であんた、紅霧の影響を受けないわけ？」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2442u/>

---

東方悠々夢

2011年6月26日20時10分発行